

あいさつ

義務教育特別支援教育指導課長 安間 英潮

「やる気→できる」から「できた→やる気」へ

平成 24 年に OECD（経済協力開発機構）が、世界 65 の国と地域の子供たち（日本では高校 1 年生）を対象に国際学習到達度調査（PISA）を行いました。

平成 21 年の同調査では、日本の子供たちの学力の上昇傾向が見られましたが、平成 24 年のこの調査において、日本の子供たちは「数学的応用力」で 7 位、「読解力」で 4 位、「科学的応用力」で 4 位でした。

これは、世界的に見て、日本の子供たちの学力が高いことがうかがえる結果といえます。

この結果を、「脱ゆとり教育」の成果だという人もいます。しかし、いわゆる「脱ゆとり教育」を標榜したといわれる新しい教育課程が中学校で全面実施されたのは、平成 24 年度からです。

したがって、子供たちの学力の向上は、各学校の、さらにいえば、全国の先生方の指導の成果です。

そのように高い学力をもっているながら、日本の子供たちは自分の学力に自信をもてていません。

「数学的応用力」は 7 位であるにもかかわらず、「数学の授業についていけなくなるのが心配だ」と感じている子供が多数いること、「自分は成績がよい」と実感している子供が大変少ないことが、アンケート調査から分かっています。また、記述式の問題（自分の考えなどを整理して書いて答える問題）が苦手であるという結果も出ています。答えを書かず、空欄のまま答案を提出する子供が非常に多いのです。これも、自信のなさが、大きな要因の一つと考えられます。

メジャー・リーグで活躍する日本人野球選手を見て、「自分もあんな選手になりたい」と思ったとします。しかし、野球のルールも、ボールの握り方もバットの振り方も知らない。そんな状態でいきなり試合に出たとしても、おろおろするばかり。これでは、夢を叶えることはおろか、野球の楽しさを感じることもできません。どれほど強い「やる気」をもっていたとしても、それだけでは先には進めないのです。ボールの握り方を教えてもらい、バットの振り方を教えてもらい、そうやって一から教えてもらって少しずつできるようになっていく。そして、思うところにボールを投げることができた、ピッチャーの投げたボールを打ち返すことができた、「できるようになったこと」が一つずつ増えていく。すると、「もっと速く」「もっと遠くへ」という意欲が生まれてくる。このように、小さな「できた」の積み重ねが「やる気」を生み出し、「あんな選手になりたい」という夢に向かって前進していく力へとつながっていくのです。

学習も同じです。たとえ前の学年の学習内容だったとしても、今まで分からなかった教科書の例題について正解できるようになったら、一つ「できた」が増えます。その「できた」を自分が実感でき、さらに周りの人からも認められたなら、小さな自信が生まれます。

小さくてもその自信は、次のステップへの「やる気」につながり、次の「できた」につながり、次の「自信」につながっていきます。その小さなステップの繰り返しの中で、社会に出てからも常に自分で自分を高めるために前向きに学んでいこうとする心が養われていくはずです。

私たちは、子供たちが自分の人生を、自信をもって堂々と歩いていける人になってくれることを願っています。その歩みの初めの一步を踏み出させてあげること、それこそが、今、私たちがなすべきことなのではないでしょうか。

★ 本メール・マガジンの配信を希望する方は、件名に「メール・マガジン配信希望」、本文に所属・氏名を入力いただき、S9000024@section.metro.tokyo.jp へメールを送信してください。

なお、本メール・マガジンは pdf ファイルにて提供いたしますので、携帯電話では読めない場合があります。

また、メール・マガジン「Scrum」のバックナンバーは、

[《東京都教育委員会ホームページ》](#)[学び応援ページ》](#) [確かな学力》](#) で御覧いただけます。

東京ベーシック・ドリル 活用の方法について

平成26年度が始まりました。東京都教育委員会では今年度も、児童・生徒一人一人の「確かな学力の定着と伸長」を目指し、授業改善や学習指導等に関する情報を配信して、学校や先生方の教育活動を支援します。今年度もメール・マガジン「Scrum」を、ぜひ御活用ください。

ここでは、4月に配布しました東京ベーシック・ドリルを効果的に活用する方法について御紹介します。

東京ベーシック・ドリルとは？

平成26年4月に都内全公立小学校にデータを配布しました。小学校4年生までの国語・社会・算数・理科の4教科の学習内容のうち、「これだけは身に付けさせたい」学習内容を繰り返し学べるようにまとめたドリルです。

習得に課題のある児童に対して、小学校卒業までに、計画的・段階的に基礎・基本を定着させることができる教材として活用できる内容になっています。

国語

1年から4年までの「言語事項」に繰り返し取り組むことができるよう、同様の内容のドリルが複数用意されています。また、「漢字」については、1年から4年までの全ての漢字（読み・書きともに）が網羅されています。

言語事項

①	雨が（ ）とふりはじめた。
②	日よう日は、とても（ ）とすべることができた。
③	はさみの先は、（ ）にむけるとうがふない。
④	（ ）の道をあわぐ。

つぎの文の（ ）にあてはまることばを、あとの（ ）からえらび、かきましよう。

（ ）	のんびり	とがって
-----	------	------

漢字

①	木が「ついで木、二つで木、三つで森。」
②	はっぱが「まい、きいろになる。」
③	木ようびは、綱にえんそく。
④	二ひきのめだかと三ひきのあめんぼう。
⑤	樹の木かげで、「やすみ。」

の漢字の読みを（ ）の右側に書きましよう。

全ての学習に必要な、言葉や漢字を適切に使うことができる力を高めていきます。

社会

3・4年の地図を用いた内容に繰り返し取り組むことができるよう、同様の内容のドリルが複数用意されています。また、発展として「日本の国土」「東京都と外国のつながり」という内容が含まれています。

類似問題に何度も取り組み、基礎・基本を定着させます。

2-33 東京都の位置を地図上で示し、その位置を説明しよう。

2-34 東京都の位置を地図上で示し、その位置を説明しよう。

同様の内容

理科

3・4年の学習内容に関するドリルとともに、「観察・実験器具の取扱」に特化したドリルが用意されています。どちらも、同様の内容のドリルが複数用意されています。

3年「昆虫と植物」

1-1 観察器具の扱い

観察・実験「星ざ早見のつかい方」

6 星ざ早見のつかい方

類似問題に何度も取り組み、一定パターンの問題ができるようになります。

算数

1年から4年までの内容について、学年ごとに「診断シート」「解説シート」「練習シート」があります。「診断シート」でその学年の内容の定着度を確認し、「解説シート」と「練習シート」で、できない箇所をできるようにします。

先生



いよいよ新年度がスタートしました。
5年生のみんなは、4年の内容がどのくらいできるのかしら。4年のベーシック・ドリル（診断シート）で確認しましょう。

診断シートに取り組む。

診断シートA

A1	4年 算数	学年	学期
1	数の数を読みましよう。 302904718961	1	1
2	真分数として、1)の中の位までの4桁にしましょう。 001472(千の位)	2	1
3	計算をしましょう。数を整数で読み、おろきかいたきはあまりもどしましよう。 808÷259	3	1
4	計算をしましょう。 5.2	4	1

【算数における
3つのステップ!】
① 診断シートで確認
② 解説シートで復習
③ 練習シートで習熟

児童A



私は、全問できていたわ。



Aさんは、全問できましたね。4年の内容ができることを認定します。 **認定証を発行**

児童B



私は3番ができなかったよ。



Bさんには、3番ができるように、わり算の解説シートと練習シートを渡します。繰り返し取り組んで、できるようにしましょう。

認定証のデータもCDに入っています。御活用ください。

解説シート

4年 3 解説	算数のわり算	学年	学期
800÷20	800÷20	1	1
690÷3	690÷3	2	1
800÷20	800÷20	3	1
690÷3	690÷3	4	1

練習シート

4年 3 (1)	4年 3 (2)	4年 3 (3)	4年 3 (4)
算数のわり算	算数のわり算	算数のわり算	算数のわり算
① 800	① 900	① 900	① 324÷42
② 120	② 480	② 120	② 205÷53
③ 400	③ 920	③ 320	③ 293÷48
④ 040	④ 650	④ 430	④ 158÷29
⑤ 600	⑤ 840	⑤ 300	⑤ 115÷16
	⑥ 078	⑥ 700	⑥ 326÷57

一人一人のつまずきに応じて、立ち戻って指導できます。
練習シートは、データを書き換えて使用することもできます。

※「練習シート」の替わりに、各地区や学校で用意しているドリルを使うこともできます。

診断シートB

B1	4年 算数	学年	学期
1	数の数を読みましよう。 4128370480245	1	1
2	真分数として、1)の中の位までの4桁にしましょう。 28493(一の位)	2	1
3	計算をしましょう。数を整数で読み、おろきかいたきはあまりもどしましよう。 184÷27	3	1
4	計算をしましょう。 5.11	4	1

以前、4年の内容の定着度を確認しただけれど、その後どのくらいできるようになったかしら。診断シートBを使って、再度確認しましょう。

※「診断シートB」は、「診断シートA」と同様の内容です。

学年の最初と最後に診断シート(A・B)を使用することで、学習間隔が開いて忘れがちな内容についても強化することができます。



まず、診断シートを活用して、前学年までの学習内容の定着を確認しましょう。次に、一人一人のつまずきに応じて、本ドリルや学校独自の教材等を活用し、基礎・基本の確実な定着を図っていきましょう。

採点プログラムを効果的に活用しましょう。

先生



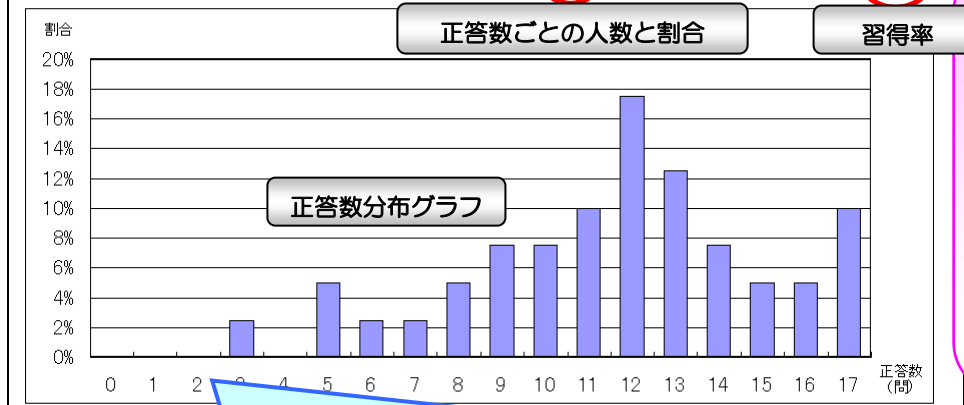
先日、私の学級でベーシック・ドリル「診断シート A」に取り組みました。そのときの児童の状況を、採点プログラムに入力しました。採点プログラムの入力の仕方は、次のとおりです。

- ① 入力シートに学校名、児童数、組、出席番号を入力します。
- ② 入力シートに大問ごとの採点結果を、正答を「1」、誤答を「0」で入力します。

大江戸 小学校 児童数 40 名		入力シート																		
組	出席番号	問題番号																	正答数	正答率
1	1	1	0	0	1	1	1	0	0	0	1	1	0	1	1	0	1	0	10	58.8%
1	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	5	28.4%	
1	3	1	1	1	1	0	1	0	0	1	0	1	1	0	1	1	0	10	58.8%	
1	4	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	0	1	0	1	1	11	64.7%	
1	5	1	1	1	1	1	1	0	1	0	1	1	1	0	1	0	1	12	70.6%	
1	6	1	1	1	1	0	1	1	1	0	1	1	1	0	1	0	1	11	64.7%	
1	7	0	0	1	1	0	1	1	0	1	1	1	1	1	1	0	0	11	64.7%	
1	8	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	17.6%	
1	9	0	1	0	1	1	1	1	1	0	1	1	1	0	1	1	1	12	70.6%	
1	10	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	17	100.0%	
1	11	1	1	1	1	1	1	1	0	1	0	0	1	1	0	1	1	11	64.7%	
1	12	0	0	1	1	0	0	1	0	1	1	1	1	1	0	1	1	10	58.8%	
1	13	1	1	0	0	0	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	12	70.6%	
1	14	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	11	64.7%	
1	15	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	12	70.6%	
1	16	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	12	70.6%	
1	17	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	12	70.6%	
1	18	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	12	70.6%	
1	19	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	12	70.6%	
1	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%	
1	21	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%	
1	22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%	
1	23	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%	
1	24	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%	
1	25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%	
1	26	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10	58.8%	
1	27	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%	

【お願い】
出席番号欄に番号が入力されると、データに反映されます。正しいデータが作成されるように、不要な出席番号は削除してください。

大江戸 小学校 児童数 40 名		大問ごとの正答率																	平均正答数と平均正答率	
問題番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	平均正答数	平均正答率	
正答率	0.0%	0.0%	0.0%	25%	0.0%	5.0%	2.5%	2.5%	5.0%	7.5%	7.5%	0.0%	17.5%	12.5%	7.5%	5.0%	5.0%	11.6	68.4%	
人数	0	0	0	1	0	2	1	1	2	3	3	4	7	5	3	2	2	4	40	
割合	0.0%	0.0%	0.0%	2.5%	0.0%	5.0%	2.5%	2.5%	5.0%	7.5%	7.5%	0.0%	17.5%	12.5%	7.5%	5.0%	5.0%	10.0%		



- ③ グラフシートに、
 - ・ 大問ごとの正答率
 - ・ 平均正答数と平均正答率
 - ・ 正答数ごとの人数と割合
 - ・ 習得率（全問正解の児童の割合）
 - ・ 正答数分布グラフが表示されます。

【実態把握】
正答数が10問に満たない児童が全体の25%いることから、既習事項を授業の開始時に全体で確認する時間を設定していく必要がある。

【目標設定】
習得率（全問達成の児童の割合）が10%である現状を、正答率の低い問題から重点的に再確認を行い、2学期終了時までには習得率70%まで上げること。

東京ベーシック・ドリルを活用して、個に応じた指導を行うとともに、採点プログラムを用いて結果を分析し、学級や学校全体の授業改善に取り組んでいくことが大切です。東京ベーシック・ドリルをぜひ効果的に御活用ください。